

関大探検部と私

読売テレビ 石田節夫

探検という言葉は、現代の憂鬱な閉息状況に生きる若者にとっては、なるほど甘美でロマンに満ちた言葉だと思う。

かつて19世紀の野心的な探検家達が試みたような、破天荒な人生に自らを置きかえてみて、ひとときの夢をむさぼってみる。ひとえ当時の探検家達が、国家の帝国主義的拡張という時代の制約から逃がれえなかったとしても、海を越え、ジャングルを切り開いて、まだ見ぬ地形や、民族との出会いに胸をときめかず行動体系は、それ自体、ある種のロマンチズムを感じさせるに余りある説得力を持っているのだろう。

私が関西大学探検部とつき合い始めたのは、約15年前である。

1969年、三重県の洞窟調査に、探検部初代OB、山本善孝氏（読売テレビ勤務中）と参加、初めて洞窟探検を体験したものである。

洞窟の中の恐怖感、絶望感、現実と妄想が飛びかうなかの孤独感を味わったものである。しかし洞窟調査が終了した時、何もしないのに、満足感に酔い、自分自身の気持ちを押えることが出来な

い程興奮したものであった。

私も学生時代、関大ボクシング部に籍を置き、四角いジャングルで肉体をぶつけ合った経験者であるが、未知への憧れとロマンを求めて、何かにチャレンジしている時ほど、人間の限界を知ることができるのではないだろうか。その素晴らしきは、何物にもかえがたいと思う。

現在、一般的な若者は、大きなものに挑戦し、たとえ砕けても再びそれに挑戦するという、あくまで目標を追求し達成しようとする姿勢や信念に欠けてきているのではないだろうか。そんな中で、関大探検部の諸君が、青春をぶっつけ、体力の限界に挑戦し、探検という行為に全エネルギーを注ぎ込んでいる姿に心より敬意を表します。

私は、「アドベンチャー」、「チャレンジ」、「スピリット」と言う言葉が大好きである。

社会に出てからも、関大探検部で学んだ精神は必ず実を結び、これからの長い人生に役立つことであろう。

最後に関西大学探検部の栄光と御健斗を心よりお祈り致します。

